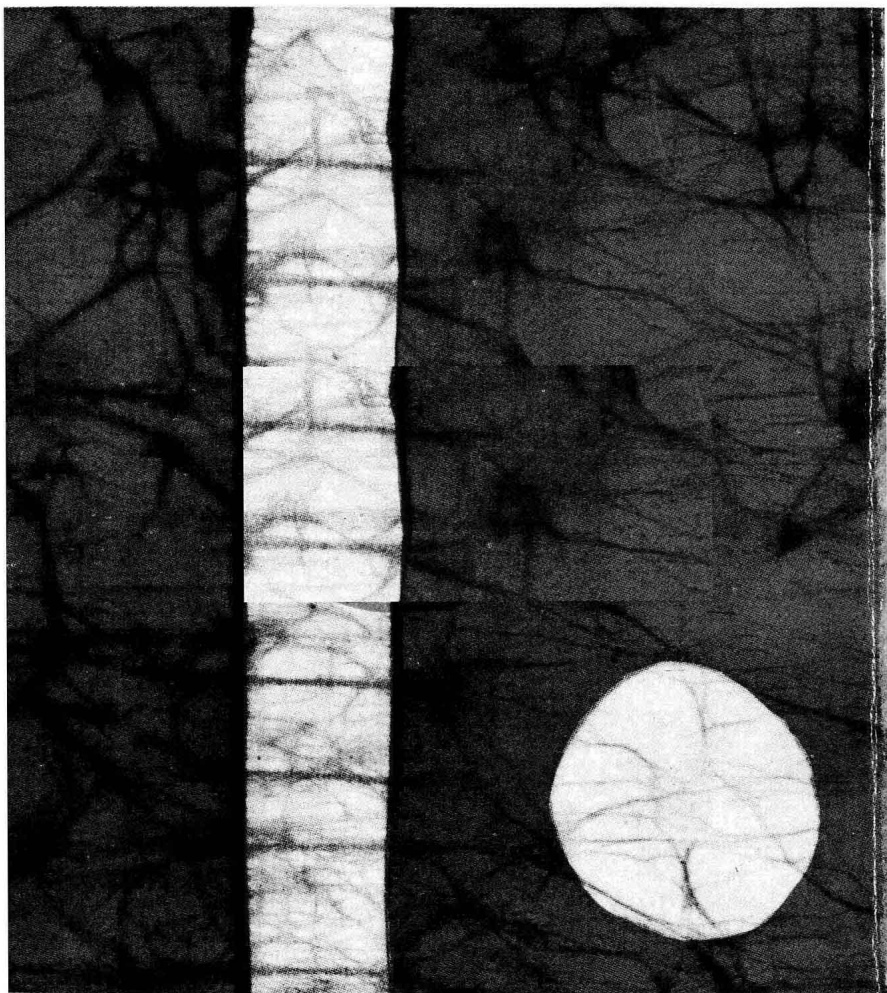


なが
流 れ る ひ
日

芝木好子



東方社版

なが
流 れ る ひ
日

(親丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和三十九年七月二十五日発行

定価三八〇円

著者 芝木好子

発行者 石渡磨須子

整版者 内田柳次郎

東京都文京区高田豊川町六〇

発行所 東方社

振替東京五七七七四番
電話大塚〇一八七三番
七〇三六番

(印刷・邦文堂印刷)

長編小説

流
れ
る
日

芝
木
好
子

目次

第一章 息子

5

第二章 流れる日

37

第三章 板前

253

装
幀

赤
坂
三
好

第一章 息 子

1

東京に学会があつて久しぶりに上京してきた橋爪志郎は、こんな時でなければ会わない旧友と三、四人で、早速夜の巷へ出ていつた。有楽町へんを一、二軒飲んだあと、志郎が案内する番になると、銀座も京橋寄りの、橋の袂の食べもの横丁へ入つていつた。横丁の中ほどに小ざつぱりした料理屋がある。入るとき、

「ここが松善か、洒落たところを知っているね」

一人が言つた。名前を聞いていたのである。入口に比べてなかは広く、突当りに白木の台が巡らしてある。手前は片方が椅子で、片方は座敷になつていた。志郎はかなり混んだ時分どきの店へさつきと入つていつて、奥の台の端へ陣取つた。板前は顔を見るとお辞儀して、

「いついらつしやいました」

と挨拶した。

「学会があつてね」

「今、お呼びします」

女中たちも顔見知りとみえて、次々と丁寧に挨拶していた。この白木の台の奥は調理場で、四、五人の若い者が働いていた。店も調理場も清潔で、落着きがあつて、座るとほつとするような雰囲気のお店であつた。中年の客がほとんどで、美味そうに酒を飲んでいる。

「佳い店を知っているね。田舎にいるわりに気が利いてるじゃないか」

「橋瓜は江戸つ子だよ、もともと」

「ははん」

と一人が、なにか感付いた声を出したが、他の仲間は解らずにおしほりで顔を拭いている。奥から松善の主人が白い仕事着で現れた。あまり柄はないが四十代の顔も動作もきびきびした感じで、

「いらつしやい！」

という声に張りがある。

「案外元氣そうじゃないか」

志郎は眼を当てていた。

「ここに立つてる分には、元氣なんで」

主人は色が白く、顔立ちも緊つて、髪の刈りような短いせいかな粹なところがあつたが、客に挨拶する笑顔は擦れていなかった。志郎たちの前へお銚子が並ぶと、主人は鱸すずきの刺身を自分の庖丁でこしらえて彼等の前へ出した。客の口が一斉に動いて、

「美味い」

誰となく眼が合つた。酒も魚も佳いための満足感がしよつぱなに彼等を捉えた。陶酔の期待がふわりと酒の香になじませてくれる。突出しは塩出しした蔵^{ぐら}で、これが柔らいだ若々しい味である。長野出身の一人が、この蔵は信州だと我がことのように自慢しはじめた。主人はせつせと次の庖丁にかつてゐる。

「佳い酒だ、僕も今度からこの店に決めた」

「どうぞ」

とおかみさんがそばへきて挨拶した。素顔に近い丸顔の、素人っぽい飾りけのないひとだつた。働くことに骨身を惜しまない感じである。

「いらつしやいませ、お待ちしてました。お元氣ですか」

「ええどうにか。加寿子がよろしくと言つてました」

志郎は友人を振返つた。

「君の弟さんだろ」

感付いていた一人が言つた。あとの二人は眼をまるくしている。主人は心もちきまり悪そうに、

「橋瓜正五です、不肖の弟で」

と頭を下げた。この主人と、長髪に眼鏡をかけた志郎とは、かけ離れた存在に見える。

「僕の兄弟は変り者が多いんだ。建築をやつてゐるものいれば、絵描きもいるし、以前は満州浪人もいてね、この兄は死んだが」

志郎はこのほかに姉もいると説明した。店の主人の正四はその兄妹のなかの自分はみそつかずで、と謙遜したが、この料理の場にいる限り彼は少しも遜色のない男らしさを持つていた。口数少なく店の者を動かしながら、自分はせつせと魚を料理している。鮑あわびのぷりぷり固い身に庖丁が当たると、滑るように易々と料理されてゆく。これを口にする歯応えは新鮮で、得も言えなかつた。客たちはくつろいで、酒を汲み交した。客も騒がしくなく愉しげで、主人も内儀も出しやばらない。暖簾をくぐつた新しい客が、満員の客をみて帰つていつても、店の主人は物欲しげな風など見せない。

「いいねえ、この店。お酒がおいしく飲める」

「昔からここにあつたかしら」

「戦災後にブラックから始めて、家内と二人で築地から毎日仕込みを背負つて帰りましてね」

苦勞しました、という調子が、あまり苦勞らしく響かない。話の途中で刺身の注文が入ると、さつと身構えて、若い衆に冷蔵庫をあけさせる。平目の身がきれいに剥がれる早技は、台のまわりの客の眼を奪う見ものであつた。薄い黒紗幕のような皮を着た魚は、忽ち白身の肌に光つて、艶をまし、ほのかに身を反らせて皿に盛られる。

「その長い庖丁が、伝家の宝刀に見えるじゃないか」

客の一人は舌を巻いて感嘆した。

「これしか能がありませんからね」

主人は言つた。長い年期のかかつた仕事ぶりというのだろう。時間がきて連れの客が帰つてゆくと、

志郎は一人で銚子をあげた。そのうち女中が知らせにきたので、立つて外へ出た。表通りへ歩いてゆくと洋服に着替えた正五が待つていた。

「お店、いいの？」

「かまわない。ここんとこ軀の具合が思わしくないんで、かみさんが早く帰れ帰れというんだ」

正五は流しの車を停めて、兄から先に乗込ますと、築地へ走らせた。彼はここ一年ほどからだの調子が思わしくなく、胃腸が悪かった。治療はしているがはかばかしく快方に向わなかった。

「入院して、徹底的に調べたらどうだい」

「なにしろ忙しくつて」

築地新富町の震災に焼け残った古い町筋のなかに、正五の住居があつた。築地川に近いちよつとした通りである。同じ松善という料理屋があつて、その横手の外階段を上がると、二階が住居になつてゐる。四つほど部屋があつた。女中が夜食の支度をしてゐた。志郎はS市から出てくると、ここに泊まることにしてゐた。一番気楽だからであつた。家にもどると正五は急に張りを失つて、座つた背に座椅子をもつてこさせた。

「こうしないと背骨が痛いんだ」

「よく調理場に立ちずめでいられるなあ」

「あれは戦場だから」

正五は夜食に海苔茶漬を流しこんだ。そうしないと胃が痛むのだつた。食後に一息入れると、彼は

思いあまつて言つた。

「修自のことだけ、力を貸して下さいよ」

「S市に預かるのはいいが、とても来ないだろう」

「なんとか行かせるから。ここは環境が悪い」

「今、家にいないのか」

「近くのアパートに勉強部屋を借りてるが、例の女の子に大分深入りしているから、勉強もあつたものじゃない」

正五はそう言つた。

「女の子は幾歳なの」

と志郎は訊ねた。

「修自と中学が一緒だから十九歳の娘で、テレビにちよくちよく出ている。派手な顔立ちの子で、芸名は菊乃井……」

「菊乃井なら、お力とか力子とかいう名だろ」

「まさか、一葉じゃあるまいし」

正五は失笑した。菊乃井薫は小学生の頃から児童劇団に所属していて、目立つ子供だった。下町の中学なので、芸事の出来る子供もかなりいたが、その時分から薫は修自と仲が良かった。その関係が今も続いている。しかし正五はその娘も、その母親も好きになれなかった。南壳第一で、ほとんど他

を顧みる暇のない彼も、一人息子の修自に関しては捨ててもおけなかつた。薫のあとを追いかけているうちに、修自は大学入試には落第する、その後の受験勉強も身につかない。このままではたぶん、ぐれてしまふだろう」

「死んださぶちやんにも合わす顔がないからね」

「そのこと、修自は知つてゐるか」

「知つてゐるとも。親に文句を言うとき、血の繋がらない親子は仕方がない、なんていうからね」

「血は繋がつてゐるな」

志郎は苦笑した。修自の父親の三郎は終戦時に満州で死に、赤ん坊の修自を抱いて引き揚げてきた母親も、二年目に肺を病んで亡くなつた。修自は叔父の正五に引き取られたが、物心もつかない幼時のことで、なにも知らなかつた。近所のお節介な人間がわざわざ教えてくれたのである。

この頃は子供の方が強いから、血の繋がらない親子は、などとひらき直られると、こつちがどきつとくる。

正五は息子に対する自信を持っていなかつた。一緒に遊んでやる時間もなかつたし、勉強を教える力もない。教えてやれるのは庖丁くらいだが、修自にはともかく大学だけは出してやりたい気があつた。人前で物をいう場合、教養に裏づけられた言葉でないと、これからの世の中は通らない。正五は下町の早熟な環境をおそれている。修自を薫から引き離すためにも、S市の志郎の許で当面面倒をみてもらいたかつた。

正五の妻の民子が、京橋の店を締めて戻つてきた。

「修自は部屋にいませんでした」

済まなような表情をたたえている。修自を育てながら、乳を含ませたことのない女の初々しさが感じられるひとだつた。他人に物を言いかげられると、眼許の含羞んでくるようなところがある。そういう時、彼女はすぐ、

「おとうさん」

と正五に助けを求めた。それでいて商売のことではしんの強いこと無類であつた。朝から晩まで寸暇もなしに働くことが身についている。彼女は不安氣に志郎へ訊ねた。

「修自は家庭がつまらなかつたんでしょうか」

「さあ、あの年頃は難かしいし、明日でもよく話してみましよう。それより正ちゃんの病院行きのほうが先決だ」

「お得意さんにお医者様を紹介していただいたから、別の病院へ行つては悪いというんですよ」

「冗談じゃない。よくならなければ別の病院へゆくのは当たり前でしょう。どうも義理堅くて、旧弊だな」

志郎のような地方の大学の浮世離れした教師の眼にも、正五夫婦の手擦れのしない人柄が珍しく映るのだつた。

三百六十五日、いや魚河岸の休日を除いて、あとは雨が降ろうと大雪になろうと魚河岸へ足を運ばない日は正五になかった。早起きは習慣であつた。彼がいつ出かけたかも知らずに目覚めた志郎は、朝食を済ますと、民子に教えられて近くの修自の勉強部屋へ行つてみた。築地川を背にした通りは古い東京の面影が残つていて、三軒長屋があつたり、木造三階建の旅館があつたり、煮メ屋があつたりした。隅田川添いの駒形に育つた志郎には懐かしい下町の景色である。古びて、木口に浸みついた生活の匂いが、饅^すえた臭気で漂つてきそうな家並みである。アパートは橋の向こう側で、木造の粗末なものだつた。修自の部屋は二階である。

「誰だよ」

と寝呆けた声でノックに応えた本人は、てつきり家の者と思つていたので、志郎叔父を見ると狼狽した。部屋は四畳半で、その真中に敷かれた万年床を彼は一度に折上げると、押入へ放り込んだ。修自は受験浪人という先入感には似合わず大柄な、肉付きの良い、六尺近い背丈からいつても堂々とした青年であつた。流石にあわてた顔にまだ少年の面影が宿つているのは、半端な年齢といえよう。

「勉強してるのかい」

志郎は窓際へ座蒲団を引つぱつて、そこに落着いた。若い男の部屋は自分にも経験があるが、散らかった上に、淫靡な、不精たらしい匂いのするものだ。煙草を取りだして、灰皿を探したが、見当た

らないところをみると、修自は煙草はやらないらしい。

「大学はどこを受けるの」

「受験ですか。僕は大学は受けないかもしれません……」

修自は言いよんだ。

「親爺さんは大学、大学とすすめますよ。勤め人になりたければなれと言います。だけど僕くらいの出来の男がサラリーマンになつても知れてるでしょう。そんなくらいなら、写真科を出てカメラマンになるとか、俳優養成所を出て俳優になるほうが早いでしょう。料理を覚えるのも僕は早いほうですよ。うちの店のように三年も洗い方をやつて、やつと魚を焼いたり、煮たりしなくたつて、二、三回教えてくれれば鮎だつて姿よく焼いてみせるし、酒のお燗もわけないんです。魚の料理は、これは、親爺さんは神様みたいだけど、秘訣を教わればやれると思う。ただ手つとり早く教えてくれないから嫌気がさすんです。僕は料理屋の板前には、正直いつて魅力はありません。ただ松善を継いでもいい理由はあります」

「ほお」

と志郎は甥のいくらか口を尖らせた顔を見ていた。こうして眺めると、修自の豊かな波打つた髪は三郎に似ている。

「理由は、親爺に言つても通じないから話さないんです。僕は銀座の旦那衆になりたい気はあります。店が繁昌して、経営がもつとうまくゆけば、のしてゆけます。親爺にはそんな気は皆目ないの、解る